

対話を通して

Ryushin, Sudo

須藤 龍真

(インド哲学史 2011年度入学)

哲学コース



私の所属するインド哲学研究室は文学部の「哲学」コースの中に置かれている研究室です。インドと聞くと、カレー、ヨーガ、ブッダ……様々な言葉が頭に浮かんでくるでしょう。では、インド「哲学」と聞くとどうでしょう。うーんさっぱり、なんて声が聞こえてきそうです。そもそも、「哲学」が何をしているのかよく分からない、という人もいるのではないのでしょうか。

実は、私たちの日常的な活動の中に「哲学」が対象とする問題が溢れています。絵画を鑑賞する際に感じる美しさとは何か、物事の善し悪しを決定するものは何か、何かを信仰するとはどういうことか……。そのような、日常に隠れた、しかし、科学の知識のみで解決することが困難にみえる重要な問いを分析し、言葉にする営みは「哲学」の一側面と言えます。

そして、古今東西、様々な哲学者と呼ばれる人々がその問いに答えを与えようとしてきました。大きな山に登ろうとする時に、目の前に鬱蒼と茂る未踏の森が広がっていると、人の通った道筋が見えているのとでは大きな違いです。私達が今、先に挙げたような問いに答えようとする時にも、既に蓄積された議論を大いに活用する外ありません。過去の哲学者との対話を通して、自分の言葉で問いに答えるための道具立てを整えていく過程こそが、大学で哲学を学ぶ醍醐味であるといえるでしょう。

私は学部を通じてインドの論理学について研究しました。私たちは政治家の演説や討論番組を見て、「この人は説得力があるなあ」「この人の説明はあまり納得出来ないなあ」と感じます。このような印象の差は一体どこから生じてくるのでしょうか。インドでは紀元後2世紀頃には既に、どのような物事の説明の仕方が正しいのか、討論の勝敗はどのように決めるべきか、といったことが議論されていました。インドの哲学と聞くと何か深遠で神秘的な思想をイメージするかもしれませんが、そこで為されている議論はとても分析的で理路整然としたものです。地理的にも時間的にも遠く離れたインドの思想から私たちは未だ多くを学ぶことができるのです。

また、インド哲学研究室ではそのような「哲学」的な問題に留まらず、インドを中心とした南アジアの「文化」を対象として様々なアプローチで研究が行われており、詩文・宗教・医療・美術・歴史・衣食住など広範にわたるテーマを扱うことが出来ます。古典語であるサンスクリット語やチベット語等の南アジアの言語で書かれた、古くは紀元前のものから、手に入るものであれば何でもあり、それらに関係するテキストを文献学的手法に基いて緻密に読み込んでいくことがこの研究室の基本的なスタイルです。漢訳でしか馴染みのない仏教経典を、原語であるサンスクリット語で読むことも可能です。また、時には「ポリウッド映画」を鑑賞し、研究室の皆で本場のカレーを食べるなど、五感を通して南アジア文化を摂取しています。

大学での研究は自ら問いを見つけ、その答えを模索しなければなりません。ですが、文学部にはどの研究室にもそれを手助けして下さる先生方や先輩方がいらっしゃいます。是非、十分に研究室を訪問し、自分の関心にあった研究室を見つけ、満足のいく大学生生活を作り上げて下さい。

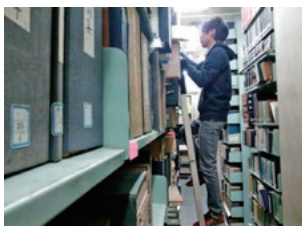
歴史学について

Okamoto, Youji

岡本 耀司

(東洋史学 2012年度入学)

歴史学コース



高校で日本史・世界史の授業が苦手、あるいは嫌いだっ方は歴史学コースの研究室を軒並みスルーしていきますが、ちょっと待ってください。知識の詰め込み・暗記に嫌気がさしていたそのような方々にこそ、歴史学をおすすめしたいと思います。

大学で学ぶ歴史学において、知識としての「歴史」はあくまでも「材料」であり、それを調べる必要はあっても覚えること自体が目的になることはありません。その「材料」としての「歴史」に、「なぜ?」「ホントに?」と自らの視点でどんどん切り込んで料理していくのが「歴史学」なのです。教科書に載っている「歴史」だろうが何だろうが、ある「事実」に対しての解釈は何通りでもあります。歴史学は、過去に限らず世にあまねく存在する様々な「事実」を、再解釈していくための手段と言えるでしょう。

とはいえ、そのような再解釈を可能とするにはしかるべき手法や姿勢を身に付けておかねばなりません。私の所属する東洋史学研究室の場合は、そのために様々な文献を読解する方法を学んでいきます。読解とは、書いてあることを鵜呑みにすることではありません。例えば、「AさんがBしました」ということが史料から読み取れたとします。それに対し、「なぜAはBしたのだろうか?」「果たして本当にAはBしたのだろうか?」「この史料を残した人物は、Aにどんな印象をもたせようとしてこう書いたのだろうか?」と様々な疑問をぶつけていながら、史料の裏側にある情報に迫っていくのです。もちろん、それを調べるための資料は大学にそろっていますし、具体的な手法や思考のためのヒントは先生方が教えてくれますから安心して下さい。また、こうしたことを続けていくうちに、情報を多角的に眺めることのできる柔軟な姿勢を養うこともできます。

そして、そのような姿勢をもって世界に目を向けたとき、実に多様な文化・思想が私たちのまわりに渦巻いていることに気づくことでしょう。東洋史学研究室が主な学問対象としているアジア地域では、「民族」や「国家」という枠組みが作られるはるか前から、様々な集団が互いに交わりながら興亡を繰り返してきました。今日の日本もまたその延長線上にあります。アジアの歴史に対し丁寧に向き合っていくことは、日本を、そして私たち自身を相対化して見ることに繋がります。東洋史学に限った話ではありませんが、究極的には「相手が何を考えているのか、自分に足りないものは何か」を考えるのが歴史学です。どうも「非実用的」のレッテルを貼られがちな歴史学ですが、こうして見るとかなり実用に即した学問であることが分かっていただけたのではないのでしょうか。

少し話が大きくなりましたが、それだけ可能性を秘めているのが歴史学なのです。そのテーマは無限にあり、決して退屈することはありません。今まで歴史に興味がなかった方も、ぜひ歴史学コースを専門分野決定の選択肢に入れてみてください。

「文学」を覗く

Ikeda, Nao

池田 奈央

文学コース

(独文 2013年度入学)



大学で「文学」を研究するとはどういうことなのでしょう。高校までの国語という授業では、私たちは作品を読んで「主人公のこのときの気持ち」や「筆者のこの表現における意図」などを考えていたでしょう。その際、テキストに引かれた棒線や波線はいわゆる問題や教科書制作者が引いた補助線であり、レールです。高校まではそのような線を頼りにテキストを読み解くことができましたが、大学では違います。テキストを読み解く際にそのような助けなどなく、ただ自分がそのテキストに対してどのようなアプローチをするかが重要なのです。

国文、英文、仏文、中文、独文。九州大学文学コースには5つの研究室がありますが、この中で私が選択した独文研究室での経験をもとに文学研究のアプローチの例をいくつか挙げていきます。例えば、訳本の比較。ドイツ語のテキスト1つに対し、日本語の翻訳が複数刊行されている場合は多々あります。原文と複数の訳本同士を比較してみると原文のドイツ語がどのような訳になっているのかだけでなく、翻訳の些細な違いから受ける印象が大きく変わることもわかるのです。また、今度は辞書を片手に原文と対峙してみると、読んでいる際に何度も目にしたり特徴的で目を引いたりする単語などが見つかります。そのような特定の単語や文章表現からテキストを読み解く方法もあります。さらに、その作品を生み出した作者について研究することも可能です。作者の生きた時代背景を調べたり、その作者の他の作品と比較したり、作者と同時代に生きた作家やその作品を読んでみたり、一人の人間について見ていくことは一つのテキストを紐解く以上の奥深さがあるでしょう。

複数の作家、無数の作品を輩出した時代の研究の奥深さは、もう言わずもがなです。

このようにテキストを読み解くアプローチは本当に多種多様です。ここに挙げなかった方法など山ほどありますし、まさに人の数だけ作品の読み方があると言っても過言ではありません。高校までの補助なしに文学と相対することはまるで暗闇を覗いているようですが、自由なアプローチでそれに立ち向かっていくことには形勢しがたい楽しさがあります。ただ辞書片手にドイツ語のテキストを覗いているだけでも、私はいわゆる言い難い楽しさを感じています。これは文学に限った話ではなく、そのような楽しみを得られる学びは大学でたくさん見つかることと思います。それが文学、歴史学、哲学、人間科学のどれであろうと皆さんには学びの楽しさが発見できる場を選択していただきたいです。もちろんそれが文学であるならば、そしてその文学の中でもドイツ文学の門戸を叩くのであれば、私たちは先輩として喜んで皆さんを歓迎しましょう。

科学的に人の「こころ」に迫る

Maeyama, Yuka

前山 結香

人間科学コース

(心理学 2013年度入学)



皆さんは心理学という言葉聞いてどのようなことを想像しますか。身近なところだとカウンセリングや臨床心理学、心理テストなどを思い浮かべる方が多いでしょう。ちなみに私自身は、人に心理学を勉強しているというと、「人の心が読めるの?」「考えていることが分かるの?」と言われることが度々ありました。もちろん、心理学を専攻しているとはいえそのようなことはできません。では心理学とは一体どのような学問なのか、それを紹介しようと思います。

私たちは日常生活の中で、五感を通してたくさんの情報を受け取っています。そしてその情報は知覚や認知、記憶、感性といったシステムを通して脳で処理されています。まずこれらのシステムに基づいた研究テーマを設定し、先行研究を読んだ上で自分なりに仮説を立て、テーマに応じた実験や調査を行って得られた結果を分析し、なぜこのような結果になったのかを考察することで、心のメカニズムを捉えようとアプローチするのが心理学です。「実験」「分析」などの単語は他の研究室ではなかなか耳にする機会はないと思います。実は心理学は理系と文系の間位置する学問なのです。心理学研究室が位置する人間科学コース自体が「文学部」という言葉から一般的にイメージされる像からは少し離れていると言えます。

配属される研究室が決定した2年次から、心理学の知識を身に付けていくための授業が行われます。講義だけではなく、心理学実験の方法を学ぶために、古典的テーマを用いて実際に実験を行う授業があるのが心理学研究室の大きな特徴です。出た結果から考察を導き、先行研究の紹介や実験方法などと一緒にレポートにまとめて提出しなければなりません。毎週実験レポートが課されるのは正直大変でしたが、実験計画の立て方やレポートの書き方など、心理学を学ぶ身として必要な知識をたくさん得ることができました。一通り学び終えた2年次の12月頃からはグループ実験に取り掛かります。これは組まれたグループごとに研究テーマを自由に決定し、実験計画や結果の分析、考察に至るまで全て自分たちで考えて行うというものです。私の班は、画面に呈示される単語の文字色と背景の色のコントラストが視認性や単語記憶の成績に影響を与えるのかを検討しました。班員と試行錯誤しながら進めていく中で、筋道を立てて論理的に考えることの難しさや1つのテーマに向かって研究することの楽しさややりがいを感じることができました。その後も講義や演習を通して、心理学を体系的に学び、卒業論文の執筆に向けての準備を進めています。

心は目に見えません。しかしそれを科学的手法で調査し、目に見える形となって表れたデータをもとに論理的に心を理解するのが心理学という学問なのです。皆さんも、奥の深い心理学の世界に足を踏み入れてみませんか?